
ひぐらしのなく頃に ~天の道編~

LOST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に（天の道編）

【Zコード】

Z9963P

【作者名】

LOST

【あらすじ】

雛見沢に天道総司が訪れるもしもの物語。

羽入によって雛見沢に呼び寄せられた天道総司。

彼は雛見沢の惨劇に巻き込まれてしまう。

果たして天道総司と部活メンバーはこの繰り返す惨劇から逃れられるのか。

プロローグ（前書き）

はい。初めての小説です。

多分色々な所で駄目な所があると思います。

つかあります（・・・・）キリッ

改善点などがあつたら教えて下さー。

プロローグ

「ひよりを頼むぞ」

そう過去の自分に言い残し、俺は消えた。

大丈夫だ。例えこの俺が消えても、『天道総司』はいる。あいつがいる限りひよりは大丈夫だろう。

何故ならあいつはひよりを『救えた』のだから……。

(田覚めなさい……人の子よ……。)

この物語は天の道を往く男が離見沢に訪れる話である。

彼は離見沢で様々な人間と出会い、様々な因縁に直面する。離見沢にはとある現象がある。

『オヤシロ様の祟り』

この繰り返す惨劇から抜け出すべく奔走する古手梨花。

天道総司と部活メンバーの運命はどうなるのか。

これは、もしもの可能性の物語

プロローグ（後書き）

ひぐらしの方はアニメしか見てないので、後はWiki頼みだから、そこまで深い知識はないですね。

だから分からない所は俺の独断？まあ俺個人の考えでいきますんで
よろしくお願いしますm(ーー)m

第一章　『転生』（前書き）

始まるよん（一、二）ノ

第一章『転生』

「ひよりを頼むぞ」

そう過去の自分に言い残し、俺は消えた。

大丈夫だ。例えこの俺が消えても、『天道総司』はいる。

あいつがいる限りひよりは大丈夫だろう。

何故ならあいつはひよりを『救えた』のだから……。

（あうあう……お、起きて下さったのですう……。）

誰かが呼んでいる。

前を見ると、真っ暗闇の中に少女が一人浮かんでいる。

お前は誰だ？

（ぼ、僕は羽入と申します。えと…僕はオヤシロさまといつ存在なのです。）

聞いた事ないな。

(ど、どうか信じて下さいなのです……。)

まあいい、死人に何の用だ。

(力を貸して欲しいのです……。)

話を聞いていたか?
俺は既に死んでいる。

(そんなことは分かつているのです!だから僕の力で離見沢に転生させるのです!)

転生だと?

後離見沢とはどこなんだ?

(行けば分かるのです。)

ほう……力を貸す、とは具体的にどうすればいいんだ?

(今、雑見沢で繰り返されていく惨劇を止めて欲しいのです。)

惨劇か……いいだろ？。

この俺が止めてやる

(偉く皿詰満々ですね……)

当然だ。俺は天の道を往き、総てを司る男……天道。総司だ。

(ま、まあいいです。じゃあ行きますよ?)

ああ。

その瞬間、俺の体は光りに包まれた。

第一章 「転生」（後書き）

どうでしたか？

とうあえず天道は転生しました。

あの俺様キャラをどう動かすかが問題ですね（・ー・；

第一章 新任教師（前書き）

さて、ついに天道籠見沢分校に降り立つ！（笑）

今後の絡みに期待します（。・・。）

第一章 新任教師

気がつくと見知らぬ村にいた。ここが雛見沢で間違いないだろう。羽入は惨劇が繰り返されている、と言った。

……「これのどこに惨劇があるのだろうか。

どう見ても只の平和の村だ。

だが羽入の目は嘘をつく目ではなかつた。となると……

「ほう……これから起きるのか……。」

何かが背中を叩いた。人ではないのが分かる。

振り返ると、そこには赤くカブト虫を模した機械、カブトゼクターがいた。

「これが必要となる惨劇か……ワーム絡みなのかもな」考えに耽つていると、誰かがこちらにやつて来ている。

「天道先生……」ひちです！

……先生だと？

「全く……探しましたよ。今日から転任していくと聞いて……初日からビーハウスついてるですか。」

そう話していく青髪の女性。一体誰だろうか……。

「それは悪かった、所でお前は……？」

「あ、自己紹介が遅れました。私、知恵 留美子と申します。」

「どうか、よろしく頼む。」

「はい。」

一通り自己紹介を済ませた後、学校に向かうことになった。

名を離見沢分校といつらしい。

教師は知恵 留美子只一人だけであるとのこと。

まあいい、俺は羽入とやらに言われたことをすればいい。
その為の転生らしいからな

。圭一 視点

いつも通りに学校へ向かう。

ここに来てから大分経つ。今ではすっかり村に馴染んで楽しい生活を送っている。

「おはよう圭一君」

「おはよウレナ」

いつもの場所にレナがいる。その隣には魅音もいた。

「あ、そうそう圭ちゃん。今日から新しい先生が来るらしいよ？」

「え？ マジか？」

驚いた。今までは知恵先生の一人だつたし、別にそれでも十分間に合っている。まあ確かに増えるに越したことはないが……

「それで、どんな人かかるか？」

「ん~…確かに男の人だつたと思つよ。」

「どんな人かな~」

レナも気になつてゐるようだ。

そんなこんなで、学校に着いた。教室の中では、やはり新任教師のことでは話題は持ちきりだつた。

「ん？ 今日はトラップはないんだな、沙都子。」

「今日は新任の方が来るからなのですわ。明日からはまたしつかりと、黒板にはめてあげましてよ？」

「新任教師がくる日から、黒板にはまつてズタボロになつてしまつのは、圭一が可哀そ可哀そなのですよ。にぱー」

「けつ。何度も引つ掛かると悪くなよ？ 明日は俺の『トーピン』が炸裂する日にしてやるぜ。」

そんないつもの会話を続けていく。
これも学校に来る楽しみの一つだ。

「はい皆さん。 静かにして下さーい。 委員長、 お願いします。」

「起立！礼！」

魅音の号令がかかり、 全員が挨拶をする。

「今日は皆さんに新しい先生を紹介します。」

さてどんな人なのやら……

扉が開き、 新しい先生が入ってきた。

「今日から離見沢分校で教師を務めることになった天道総司だ。 よろしく頼むぞ。」

……無茶苦茶イケメンじゃねえか。

第一章 新任教師（後書き）

そりゃ イケメンだらうなあ

水嶋ヒロだもの（笑）

第三章 曇休み（前書き）

いやいやクロスオーバー楽しいなあ（笑）

第三章 曇休み

天道先生の授業は何とかいうかもうすゞかつた。

あの魅音ですら普段解けもしない問題をすらすら解けるよつになつてゐる……！

「いや～天道先生凄いねえ。おじさん感動したよ～」

などと軽口を叩いている

確かに天道先生の授業はすぐ分かりやすいのだが……。

「何なんですか？あの人ちょっと偉そつではありますんこと？」

そう、沙都子の言つ通りあの人は若干喋り方がきついのだ。

魅音は「あたしゃどうでもいいね～」と言つてゐる。あいつは勉強を理解出来たことで十分なのだろう。

「決めましたわ！」

沙都子が突然立ち上がつた。何か嫌な予感がするのは氣のせいではないな。うん。

「明日天道先生をトラップに掛けますわ！」

何でことを言いやがつた。

「沙都子ちゃん……流石にそれは……。」

レナが止めようとする。だが本気になつた沙都子は「こんなことで止まる訳がない。

まあああいう人が引っ掛かるとは思わないが……。

「明日が楽しみですわあ！おーほつほつほつほつほー！」

完全に勝った氣でいるようだ。
まあ明日に興味が出てきたな。

第三章 曇休み（後書き）

また明日～（^○^）／

第四章 票り（前書き）

宿題ダリイ　ｗｗ

では本文ぞ、（、）

第四章 署り

（天道視点）

授業を終え只今教務室で後始末をしている。

ふと気付いたことがある。そういうえば宿がない。

「探す必要があるな……。」

どうしたものか、と困っている所に知恵留美子がやってきた。
何か用があるのか？

「あの、天道先生宛にお届けものだそうです。」

知恵留美子が差し出したのは、封筒だった。

開けて中を見ると、そこにはどこのか知らない鍵と簡単な地図が入っていた。

「なるほど、ここに俺の住む場所があると言つことか。」

そうと分かれば勤務が終わり次第その場所に行けばいい。

中々几帳面なのは有り難いが、肝心の羽入がどこにもいなかつた。
ここには何かしら惨劇が起こるというのに本人がいないとは少々厄

介だな。

勤務を終え、俺は地図の書いてある場所に向かう。

それにしてもここは本当に田舎のようだ。あの時はすんなり頷いたが、羽入からは「」がどの時代かは聞いてはいない。

田んぼだらけで何も無い道を歩いているとカッフルなのか、首からカメラを下げた男女がいた。

「ん? 見ない顔だね。」

男の方が話しかけてきた。まあ確かに俺は今日「」に転生してきたのだからな。

「ああ、今日離見沢分校に転任した天道総司だ。」

「そうかい、僕は富竹。フリーのカメラマンだ。」

「鷹野ですわ。よろしくお願ひします。」

「僕は毎年お祭りの日に景色を撮りにくるんだ。」

「祭り?」

「知らないのかい?」この離見沢村には、毎年綿流しのお祭りっていうのがあってね、僕は毎年この日辺りに離見沢に来てるんだよ。あ、こっちの鷹野はこの村唯一ある入江診療所でナースをしてるんだ。」

「なるほどな。」

お祭りか…まあ村にあっても不思議ではないか。

しかしながら…どういった経緯で惨劇がおこるのだろうか…?

「今年は起きるのかしらねえ……オヤシロさまの祟り。」

「祟り……？」

「そうよ。この綿流しのお祭りの日に毎年1人が死んで1人が行方不明になっているのよ。」

行方不明に死者1人か……

「随分利用しやすい祟りだな。」

「…………つ……。」

「ん? どういふことだい?」

「殺害した後に行方不明ということにする。それだけで祟りの完成。殺人をしたい人間にとつて、まさにうつつけの日ということだ。」

鷹野の話ではここはオヤシロさまの信仰は大分高いようだ。
なら誰かが行方不明になつても「祟りだから仕方ない。」で済ますことが出来る。

「俺は夕食の材料を買わなければいけない。これで失礼する。」

「あ、ああ……。」

現時点での二人が怪しい。特に鷹野は俺の言葉を気に入つてないようだ。

「鷹野達を見張れ。」

俺はゼクターに命じ、カブトゼクターは鷹野達の方へ飛んでいった。

地図の通りに歩くと、そこにはマンションがあった。

「入りか……

鍵を見ると「02号室」らしい。

中に入ると……殺風景だ。

駄目だ。これではプライドが許さん。

俺は家具屋へ向かったのだった。

（梨花視点）

「羽入？ 貴方ビデオいつつもり？」

沙都子が眠りについた時を見計らって私は羽入に問いかけた。

「はい？何ですか？」

「何ですか？じゃないわよ。何なのよあの男。」

「天道総司ですか？あれは僕が助つ人として呼びましたなのです！」

助つ人？また何だか面倒なことになってしまった。
まずあの男は結構な堅物だと思うし、私の話なんて信じてくれなさ
そうだ。しかし羽入は何だか自信があるといった顔をしている。

「大丈夫なのです！あの人は自分の住む世界を救っているのです！」

「世界を救う？」

それが本当なら凄いことだ。だけど上手くいくのだろうか……。
羽入が言つには、大まかなことは伝えたとのこと。

「大丈夫です！明日僕も転校しますです！」

……………何だつて？

第四章 署り（後書き）

次は色々な設定を書きたいと思います（－－－）

各設定（前書き）

「」では天道の立場などを説明します（。・。・。）

各設定

天道総司

この天道は映画版の天道であり、TV版よりは、感情的……の等。

ちなみにカブトに変身することはできるが、ハイパー・カブトには変身不能。

正直ハイパー・カブトはチート並みに何でも出来てしまふので、物語がつまらなくなりそうなので、登場させません。

尚、天道が雛見沢に転生したのは、羽入が転校する数日前である。

また、この物語は「ひぐらしのなく頃に」の祭囃し編にあたる。

ひぐらしメンバーについては、特に変更点はなし。

しかし、この物語には天道がいるので、若干台詞や状況、行動に違いが出る。

また、ワームを出したりと思つてるので、戦闘シーンがあります。

時間軸上、ワームと言つよりはネイティブといった方が正確な所。

視点が度々変わるが、了承して頂きたい。

引き続き本編をお楽しみに～（^〇^）～

各設定（後書き）

以上です。

設定を書くのが遅くなってしましましたの(汗)

第五章 転校生（前書き）

遂に羽入が離見沢分校に降り立つ……！――

第五章 転校生

早朝、勤務の為に早めに学校へ向かう途中、知恵留美子に鉢合わせしたので、一緒にに行くことになった。

「あ、そうそう今日から新しく転校してくる子がいるみたいですよ？」

「ほう……で、名前は？」

「はい、古手羽入ちゃんだそうです。」

「何だと？」

俺をここに送った張本人がここに来るのか。面白い。ならさつと捕まえて事情聴取と、奴の素性を教えてもらうとするか。

「天道さん？」

「ん？……ああ、すまない。考え方をしていた。」

ついつい表情に出していたらしい。

適当に誤魔化している内に学校についた。

……………そういうえば昨日北条沙都子が俺を罷に掛けるだの何だの言っていたな。

しかし今日午前の授業は知恵留美子が受け持つ予定だった筈…………。

……………これは少々お灸を据えてやらないといけないな。

「あうあうあう…………だ、黙つてじごめんなさいなのです。」

「まあいい……。とりあえず普通に授業を受けい。」

ホームルーム前、古手羽人に会い、ここまで経緯について話した。終始平謝りだったので流石に罪悪感が出たが……。

教室の前まで来て、北条沙都子が仕掛けたであらわすラップのこと

を思い出した。

「ちよっと…………後ろに下下がってさ。」

「? ? ?

古手羽入を下がらせると、俺は教室の扉をゆっくりあけた。

「ふつふつふ……完璧ですわあ。いつもの何倍も力を入れましたのよ?」

……と、沙都子が勝利宣言をしている。

魅音も同じくニヤニヤと怪しい笑みを浮かべている。

奴め、先生相手に本当にトラップを仕掛けやがった。
そのお陰…………と言つのは何かあればが、俺の方は今日はトラップ免除になった。

トラップの構造はこうだ。

まずは扉を開けてすぐに紐がある。

それに引っ掛けたて転ぶ先には大量の黒板消しの粉がスタンバイ。

そこで立ち上るとその周り、半径1メートルの床のタイルには全て踏めばタライが落ちてくる。

当たれば痛い。

そして最後に天井から吊してある紐を沙都子が引っ張ればたーくさんの定規が一斉発射される。

後片付けは手伝わんぞ、沙都子。

そして遂に時はやつてきた。

扉がゆっくり開いた。

まずは入つてすぐの紐……！！

スタンツ。

……ジャンプした。

あ、粉も避けた。

そこから流れるような動きでタライを全て交わし定規をキャッチし、そして 沙都子に「コピングした。

「ツツツツ痛いですわ！！」

悲鳴が上がる。

天道先生は呆れ顔で沙都子を見ている。

まあ……どちらが悪いかは明白だが……。

「あ、貴方本当に教師ですか！？生徒に暴力なんて最低ですよ！？」

「今のは暴力じゃない。それにお前に生徒として先生に罵を仕掛けるのは何事だ？」

「だ、大体なんで私にコピングをしましたの！？勝手に私を犯人にしないで下さいます！？」

「俺が罵を避けた際に一番驚いていたのがお前だったからだ。……それにお前が叫んでいたのが聞こえていた。」

「ノーベル賞」――

沙都子一諦めない。どう考へてもお前に勝ち田はないじょー。

「はあ……まあ今日は」れで許してやる。
今日から新しい

生徒が転入してくる。仲良くしてやれ。

そう言つて天道先生は手招きした。

のと沙翁一や秀花女
人と同じ年くらいの女の二が人でさか

「ふ、古手羽入なのですか。よひり……よ、よひりくお願ひしみやすのですう……！」

……」れでもかと言わんばかりに噛み噛みな子だなあ。

めなされ。

しまったあーーーかあいいモードのレナになつてしまつた！

「……阿呆か、止まれ。」

なんと天道先生がレナのデコを抑えつけている。

危険だぞ先生…………！！

授業したいなあ。

「ほう……俺に逆らうか……。」

まーて待て待て。これ以上レナを煽らないでえ！

「ならばーーーーーハイハイハイツッ！！」

「…………つー？」

「おおー？あのレナのパンチを全て避けている！」

「凄い！大人だ……！あれが大人の対応だ！」

あー……いい天氣だなあ。

お日様が照ってるよ。

この日の授業は3時間目からやっと始まった。

ちなみに羽入ちゃんは終始ガクブルしていた。

第五章 転校生（後書き）

いやー天道にしては中々力オスだった筈

明日学校とかマジないわwww

第六章 残り僅かな日常

「さあ！今日は天道先生にたーくさんティープな質問しちゃうよー！」

と言つ訳で、放課後になり、天道先生を取つ捕まえて質問（尋問）を開始し始めた。

「先生はどーじ出身ですか？」

「彼女はいますか？」

「ぶっちゃけ今好きな人はいますか！？」

等々、色々質問している子供達。対する天道先生は、冷静に受け答えている。

「じゃあ取つて置きの質問ー！今日先生は知恵先生と一緒にきましたね！？」

マジですかい？それは若干興味が湧いてきたな。

これはもしかしてもしかしたらもしかすると何があるんじゃね？

「ん？あれは偶々出くわしただけだが？」

「嘘だ～！逢引かなんかじゃないの～？」

魅音がしつこく食い下がる。多分意味ないと思つけどなあ。何だろう、あの人全く隙がない。

…………あ、いい」と思い付いた。

「おい、魅音。」

「ん？」

「天道先生を部活に誘え。」

「…………おお！…ちゅことか！圭ちゃん頭いい！」

ふつふつふ……これこそが俺達が天道先生に勝つ恐らく唯一の手……！

「天道先生」

「何だ？」

「今日だけでもいいのでえ。私達の部活に参加しませんかあ？」

「…………後で知恵先生に聞いてみよつ。」

魅音が小さくガツツポーズ。これで天道先生に一泡吹かせてやるぜ

……！

「よーしー。それじゃ部活をよーじめるよー。」

「」

天道先生も含流し、今日の部活が始まるた。

まあ今田は天道先生もいるし、手軽にジジ抜きにしよう!」

「氣付いたのだが……お前達何か細工してないか？」

やはり天道先生に気付いたか……

れを目印にゲームを進めている。
始めは俺も涙を飲んだが……。

「いや～悪いねえ。勝つ為には手段を選ばずってやつだよ。ほー！上がり！」

魅音が一番乗り。

今まで思い通りに行かなかつた分すげえ嬉しそうだ。
続いてレナ、沙都子、梨花ちゃん、俺が上がつた。
いかにすごくても流石に細工されたゲームには勝てないだろう。

「ほう……手段を選ばずか……。まあいい、大体覚えた。次だ。」

何だか意地悪そうな笑みを浮かべ始めたな……。
やーな予感しかしないのは俺だけか？

「んじゃ！ 次いってみよー！」

魅音は全く気付いてないようだ。
マズいマズいマズいマズいマズいマズいマズい
マズいマズい。
絶対次何か起こる。うん。

「上がりだ」

と、勝利宣言が入る。

なん……だと？

一着で上がりやがった

「まあ、所詮子供の知恵だ。……勝つ方法ならいくらでもある。」

そう、天道先生は全てのカードを把握した後、新しい傷をつける。
傷を隠すなどして、俺達を混乱させたのだった。

という訳で、俺達が勝てたのは初戦だけ。
後は全て惨敗した。

「くうー！悔しいー！」

「天道先生……強いですね」

「僕達完敗なのです。」

「大人気ありませんわ……。」

上から魅音、レナ、梨花ちゃん、沙都子がそれぞれ感想を述べる。
各自言いたいことは沢山あります。
そりや勿論俺も1つや2つ言いたいことはあるぞ。
……無駄だろうけど。

「知れただことだ。俺に同じ技は一度と利かん。」

何だろう、若干ムカつく。

前から思つてはいたが、この人は自意識が高いのかもしれない。
あれか、俺様系つてやつか。

「そろそろ職務に戻る。暗くならない内に帰れよ。」

と言ひ訳で、今日の部活はお開きになつた。

天道視点

部活に付き合つていたため、思つてはいたより帰りが遅くなつてしまつた。

……ふむ、今日は外食で済ませよう。

確か町の方には飲食店があつた筈だ。

「こじだな。

従業員の服装が若干派手だとは思うが、まあいいだろ？。

「こりっしゃいませ。エンジンモートへようこそ。」

「これは……どういうことだ？」

田の前には緑の髪の少女がいる。大方アルバイトだろう。
園崎魅音が何故ここにいるのか。
いや、もしかしたら姉か妹かもしれない。
それが一番合点がつく。

「お密様…？」

しまつた。考えすぎたようだ。
適当な席に案内してもらひ。

注文がてら聞いてみるのが一番だな。

「メニューはお決まりでしうか？」

「ああ、このオムライスを頼む。それと……。」

「はい？」

「お前……園崎魅音の親族か？」

向こうには若干驚いた顔をしている。

そこまで意外だったか？

「えと……はい。仰る通りです。私は園崎詩音。魅音の双子の妹です。」

「そうか……何故お前は違う学校に？」

「身内の都合です。ですので……」

「いや、深く聞くつもりはない。すまなかつた。」

「いえ、それでは……。」

園崎詩音は戻つていった。

出されたオムライスは……まあ不味くはない。

だが上手いとは言えない。これではこれ以上繁盛出来ないだらう。

アルバイトには何故か女子高生ばかりで、それを見る客の鼻息が荒い。

馬鹿馬鹿しい。そんなものに何の意味があると言つのか。

会計にいくとそこには園崎詩音がレジを担当していた。

「あの、さつきは聞きそびれたんですけど……貴方のお名前は……？」

「そうだな……教えていなかつたな。俺は天道総司。先日から離見沢分校に転任してきた。」

「そうですか……姉がご迷惑をかけると思いますが、宜しくお願

いします。」

「ああ。」

会計を済ませた後は後の食材を買い、マンションに戻った。
今の所まだ何も起つていないし、鷹野を見張りに行かせたカブト
ゼクターからも報告はない。

明日はどうなることやら……。

考えだしたらキリがないので今日は眠りこついた。

第六章 残り僅かな日常（後書き）

ジジ抜きをする天道…………想像が全くつかねえ（笑）
まあ後少ししたらシリアスに突入する予定。
カブトの出し方どうしよっかなｗ

第七章 元凶（前書き）

遅くなつちゃいました。

先公に没収されたり何かあつたりと……。

まあなんとか更新出来たのでどうぞ……！

第七章 元凶

翌日も通常通り学校に行つた。

授業をこなし、昼休みを跨いでまた授業。

時間は放課後。

古手羽入が彼らの部活に入ったようだ。
まあ交流を深めるにはあの部活はうってつけだらう。

今日は学校は本当に何も終わった。

静かに終わるのもたまにはいいものだ。

……だが、このままでいいのか恐らく祭りの日辺りに何か起ころのは間違いないだらう。

いささか情報が少なすぎる。

古手羽入に問うのがいいだらう。

いい加減進展してもいい頃だ。俺の考えは、教務室に入ってきた古手羽入によつて遮られた。

「失礼しますです。」

羽入は知恵留美子と校長に聞かれないように小声で話し始めた。

「今日神社で梨花が富竹達に僕達が知つてることを話します。天道には梨花の話に信頼性を持たせて欲しいのです。」

知つてゐること…か。

「いいだろ？ 時間は？」

「はい。それは

梨花視点

「うーん…まさか鷹野さんが黒幕か……にわかに信じられないけど、梨花ちゃんの話通りなら鷹野さんが一番可能性があるのかな。」

私の話を聞いてまず反応をしたのは富竹だった。
やはり信じてくれないのだろうか…。

「でも、梨花ちゃんは僕の妻の件を予言してくれていた。だから僕は妻の死を止めることが出来た。僕は信じるよ。」

やはり赤坂は頼もしい。

私が信頼をおいている人物だけある。

これで赤坂は味方になってくれるだろう。

「いやいやこれは驚きましたねえ。まさか病気に見せかけた大量殺戮とは…。」

流石に大石もこれには驚いている。

無理ないだろ？ 数日したらこの離見沢の人々が殺されるかもしないのだ。

でもこれは全て事実。

私が何度も繰り返してきたこと。

今の今まで私達は負けてきた。

前回までは分からなかつた。

全ての元凶は鷹野だつた事に。

今思ひ返してみると鷹野にはどことなく怪しい所はあつた。

独自に雑見沢のオヤシロ様の祟りについて調べていたことや、その年に限つて富竹と鷹野の2人が死んだことが嫌に不自然だつた。

「確かにそれが有力ですね。しかし、まだ確証があるわけではないですしおまだ決めつけるのは……。」

入江の呴きが聞こえた。

判断をしづらいのだろうか……。

もどかしい……こっちとしては既に分かり切つたことなのにな。

何て言つてやるうか。

「そいつが言つていることは信じた方がいいぞ。」

……この声は天道だ。

何故彼がここにいるのだろうか。

羽入にでも言われて来たのだろうか。

それにもしても…………何故に和服に下駄履いてボウルを持っている。

「て、天道かい？」

富竹は彼を知つてゐるよつだ。どこかで会つたりしたのか？
他3人は知らないようで

「誰」いつ？みたいな顔をしている。

「自己紹介が遅れたな。俺は天道総司、この古手梨花が通う雑見沢
分校の教師だ。」

「おや、では貴方が最近雑見沢分校に転任してきた方ですか。」

既に情報が入つていたのか、大石は名を聞いて理解したらしい。
後は赤坂と入江なのだが…うん、説明は天道の自己紹介で十分だ。
今はなんとかして話を信じてもらわねばならない。
だが今は信用性にイマイチ欠ける。

これ以上私は何を言えばいい？

私はもう言いたいことは出しきつた。

「……鷹野がこの地について色々調べ回つてるのは本当か？」

「ん？ああ確かに何か調べてるみたいだよ。随分熱心に歩き回つて
いるらしいからね。」

天道の問いに富竹が答える。この質問にはどんな意味が含まれてい
るのやら。

天道もどうにかして、私の話を信用させようとしている。
彼は一体どんな方法をとる？

「はあ…これを聞いて分からんのか、鷹野が調べる理由がどこにあ

「その件については僕が反論させてもいい。僕と鷹野と入江は、東京のある組織の一員なんだ。」

「と、富竹さん。それは……。」

「いいよ。彼には隠し事は無駄だろ？ 今言わなくても、間もなく明かされるだろうさ。」

「これほどまでに早く彼らの素性がバレたのは初めてだ。この手のことを彼は得意なのか？」

「そういえば彼はここに来るまでは一体何をしていたのだろうか……。天道については謎が多くすぎる。」

「羽入が呼んだことだけは分かるのだが、それだけだ。口振りを見ると、以前から教師をやっていたとはとてもじゃないが思えない。」

「ほう……なら組織の仕事として離見沢を調査をしている、といつてとか？」

「そういうことがありますね。我々は離見沢症候群の治療方法、又はその歴史などを調べています。」

「それにしても……。」

「？」

「お前達が知らない所で調査とは、こたさか個人的過ぎてはいないか？」

「それは…。」

「やはりな、奴には多かれ少なかれ裏があるところだ。」

決定づけるように天道が言つ。

中々説得力がある。これはもう経験の差としか言いようがない。

「うーん… 中々事が揃つてますねえ。これは本当に起こりそうですねえ。」

「そうですね、これはますます信じるしかないですね。」

大石と赤坂も俄然信じる気になつたみたいだ。

良かつた。これで第一次ステップはクリアしたようなものだ。

ほどなくしてこの場は一回解散となつた。

富竹は本部に連絡をとると言つていた。

大石と赤坂は鷹野の身辺調査をするらしい。

入江は鷹野の怪しい動きがないか探るようだ。

いい方向に進んでいる。

彼の力は絶大だ。

本当に天道総司とは何者なんだろうか。

そんな疑問を抱きつつ、私は帰路についた。

第七章 元凶（後書き）

天道と鷹野が戦つたら基本天道が勝ちます。

つか負けねえな（・・・・）キリッ

ではまた次話で会いましょう。

第八章　来襲（前書き）

いやー、天道を会話に混ぜると誰かが空気になってしまつ（笑）

第八章 来襲

梨花視点

数日後、私は昼休みの時間に呼び出された。

「前原達にはもう伝えてあるのか？」

「ええ、圭一達も何かを感じてたからあつさり済んだわ。そして今田園崎の家で会議することになっているわ。」

「そうか…。よし、俺も仕事が終わり次第向かう。連中への説明は任せたぞ。」

つくづく勝手な人間だ。

まあ彼の力は必要だから仕方ないがもう少し他人を気遣うことはないのだろうか。

教室に戻る。そこにはいつものメンバーが私を待っていた。

「お、戻ってきたな。さ、食べようぜ。」

「みい、先に食べて下さって言いましたですよね？」

「なーに言ひてんだ。皆で食べた方がうまいに決まってんだろう?」

「そうだよ。私達は全員揃つて部活メンバーなんだから。」

やはりここは暖かい。私が希望を失わずにこれたのはこの暖かさのお陰なんだと思う。

なら、私はこの日常を守らなければならぬ。
1人でも欠けてはいけない。

竜宮レナの言う通り、私達は全員揃つて部活メンバーなのだから。

「じゃあ、やっぱり犯人は鷹野さんなのか。」

「うーん、その線が一番可能性が高いね。」

「で、梨花ちゃん。君が綿流しの口に殺されるつてのが今まで繰り返してきたことなんだよな?」

「はいなのです。」

「それで毒ガスか…。」

「ここから対策を打たなければならぬ。
今度こそは…！」

「分かったあ！」

「分かりましたわ！」

圭一と沙都子が同時に立ち上がる。

良い方法が見つかったのか？

「ほう…その2人は結論が出たみたいだな。」

「つて先生！？」

「ど、どうことですの！？」

「俺はこの事件、お前達のやりたいことを知っているところだ。」

「

天道が合流した。彼も圭一と沙都子同様、もう方法をつかんでいるらしい。

「方法は三つ。1つは梨花を守ることに専念する。2つ目、殺られるまえに殺る。3つ目…すでに梨花が死んでいるという事実を作り上げることだ。」

「…？ そうか…死後2日たっても何も起こらないという事実さえあれば鷹野はこの村に手をだすことが出来ない。」

しかし…そんなことが出来るのか？

私達は只の学生で、天道はその教師。

いくらなんでも奴等を情報で欺ける。とは思えない。

「もう大石に伝えてはある。これは奴…いや警察次第だ。これで断られたらさつき言つた。2つの策をとるしかない。その時は覚悟しておけ。」

皆の表情が固まる。仕方ない。もしかしたら殺されてしまつ、という重圧がのしかかっているからだ。

いや……下手をすれば相手を殺す可能性も出てくるだろ？。まさに戦争だ。

「へっ、そりかよ。例えどんなことが起きても俺はここを守る……」
「俺達の居場所なんだ。絶対に……奪わせやしない！」

「そうだよ！あたし達だけじゃない。この村に住む人達全員の命が懸かってるんだ。負ける訳には行かないよ！」

圭一と魅音が立ち上がる。それに応するように皆も立ち上がる。
そうだ。私達だけの問題じやない。この離見沢の未来が私達の手に委ねられているのだ。

「その意気だ。未来を握るのは自分自身だ。」

「皆一・絶対に離見沢を守り切るぞ……！」

「「「「オー……」」」

天道視点

時間が時間なので、皆を帰らせた。
そして俺自身も帰路についている。
部活メンバーの決意は大きい。

……人影が2つ見える。片方は知っている。

知恵留美子だ。

だが一方の黒服は知らない。

耳を澄ますと、奴等の話し声が聞こえた。

「あの、どなたでしょうか……？」

「お前が知恵留美子か？」

「え、あ、はい……。」

「すまんがお前を拉致させてもらひ。」

「え……。」

「これも天道総司を誘きだすためだ。運がなかつたと諦めるのだな。

」

「どうやら狙いは俺のようだな。

ここで知恵を危険に晒す訳にはいかない。

「その必要はない。」

俺は前へ歩きだした。

知恵視点

目の前の黒服の人は私を拉致すると言った。

天道先生を見つけだすために。

…彼に一体何の用だろうか。

とにかく逃げなくては。

その感情が私を支配していた。

だが、

「その必要はない。」

その言葉で我に返った。

「て、天道先生…。」

「天道、総司…！」

「貴様…俺に何の用だ？」

「お前は我々にとつてやつかいな存在だ。ここで死んでもらう。」

男は姿を変えていく。

バケモノだ。あの人は人間じゃなかつた。

天道先生の目付きが変わる。

「お前…俺を誰だと思っている。俺は天の道を往き、総てを司る男。

天道…総司。」

そう言い、彼は手を天に掲げる。
赤い何かが飛来し、彼の手に収まつた。

「変身」

H E N S H I N

彼も姿を変えていく。それはさつきのようなバケモノではなく、赤と銀の戦士のようだった。

第八章　来襲（後書き）

ワーム登場しました。

第三の勢力が動きだすかも…？

第九章 カブト（前書き）

書いてて思った。

俺戦闘の描写糞だ（笑）

第九章 カブト

「何故だ！？何故マスクドライダーシステムが完成しているんだ！？」

驚愕の声はワームからだった。

「俺がお前の質問に答えてやる義理はない。」

「ちいっ……！」

埒があかないと思ったのか、ついにワームはカブトに襲い掛かった。カブトは相手の動きを先読みし、的確に拳を叩き込む。

「くそつ……！」

「これで終わりだ。」

カブトは天高く飛び上がり、カブトクナイガンを叩きつけた。ワームは衝撃に耐えられず爆発した。

変身を解き、天道総司の姿に戻った彼を、知恵留美子は沈痛な面持ちで見ていた。

「あの……貴方は何者なんですか？」

「……只の教師だが？」

「嘘言わないで下さい！只の教師が戦つたりしないでしょ！？大体あれは何だつたんですか！？」

「あれはワーム。人間に擬態し裏から世界を支配しようとしている連中だ。」

「擬態つて……。せ、生徒達の中にはー?」

「心配するな。確認したがそれはなかつた。」

「そうですか……。」

「それとだが、極力外出は控えてくれ。今回は偶々通りかかりだからすぐに対処出来たが、次はそつとは限らん。」

「あ、はい……」

「……………一つ言つておぐが、俺はどこの組織にも属していない。信じてくれ。」

「……………はい。わかつてます。」

知恵留美子の答えを聞いて安心したのか、天道は自然と笑みを浮かべた。

それはいつもの硬派な顔ではなく、どこか少年のようだった。

大石蔵人はある墓の前にいた。

それは彼が親しみを込めて「おやつさん」と呼んでいた人物である。

「いやいや参りましたねえ。私が今まで必死になつてやつてきたことを全否定ですか。」

そう、天道が大石に話したことはこれまでの彼のやつてきたことを根底から覆した。

だから迷っていた。

信じるべきか、そして協力すべきかを。

協力するとなれば警察全てを動かすことになる。

負担がかかるのは自分だけではない。答えを見つけるにはまだかかる、と判断し、今日は帰ろうとした大石を止めたのは

「こんなところで会うなんて奇遇だねえ。」

園崎茜だった。その傍らには園崎詩音もいる。

「どうしてあんたらがこんな所に……」

言いかけて大石は園崎茜が抱えている花に気付いた。あれはいつも墓石に添えられている花。
てつくり誰か親しい間柄の人気が持つてきていると思つていた。

「もしかして、いつも花を添えていたのは……」

「死者を弔うのは人として当然だわ。違うかい？」

「天道の言っていることは本当だった。
自分は今まで全くの勘違いをしていた。

「大石さん。園崎家はオヤシロさまの祟りとは一切関係ありません。
どうか信じてください。」

園崎詩音が言う。

「……そこまで言われたら信じるしかないではないか。

「私達は少々、長引かせ過ぎたのかもしませんねえ。」

「そういうこつた。あたしらの時代は終わりだよ。」

「…………天道さん。あんたの言ったことは全て当たりでしたよ。この大石蔵人、あんた達に協力させてもらいましょう。」

決心はついた。後は舞台と役者を揃えるだけ。
自分は既に脇役なのだ。

次世代に全てを懸けるとしようではないか。

「ところで、あんたの言うその天道ってのは誰だい？」

「おや?知らないんですか?彼はあんたの娘さんが通う雛見沢分校の教師ですよ。」

「新任かい?……前原といい天道といい、随分な態度を取ってくれるもんだね。」

「それもまあ次世代つて奴ですよ。」

「興味が湧いてきたねえ。その天道、お目にかかりたいもんだ。」

実の所天道総司という男には、警察も興味を持つていた。
何しろ身元が一切不明なのだ。確かな情報が全くと言つていいほど
ない。

だが天道は真実を色々知つている。恐らくまだ何か隠しているだろ
う。

園沢親子と別れ、一人考えに耽るのであつた。

天道視点

…………少々厄介なことになつた。まさかワームがこの世界にいる
とは思つていなかつたからだ。

ワームのことを前原達に伝えるか伝えないかで迷うな。

どちらにしろ奴等ではワームに太刀打ちできる訳がない。

ならば教えなければ、鷹野を打ち破るために全てを知つておかな
くてはいけない。

だがまず先にやることがある。

お膳がまだ揃っていない。園崎詩音だ。彼女が何かしらの関係を持
つていることは口振りから大体わかつた。

「オヤシロさまについて知つていいこと……ですか？」

「ああ。お前は何か知つているな?」

「…………私、好きな人がいます。」

「……?」

「でも行方が分かりません。その……オヤシロさまの祟りで。」

園崎詩音の話をまとめるところなる。

彼女が好きな人物と言うのは北条沙都子の兄である北条悟史。だが去年突然失踪した後に行方知れずとなつている。この村ではオヤシロさまの祟りによつて行方不明といつことにされている。それ以後彼女は独自にこのオヤシロさまの祟りについて調べ始めた。

「…………と、いうことでいいんだな?」

「はい……。」

まだ彼女は知らないようだ。オヤシロさまの祟りなんてものは只のでつち上げであることを。

「まず言ひことがある。オヤシロさまの祟りなんてものは存在しない。」

「…………え?」

「あれは作り話だ。オヤシロさまを隠れ蓑にした殺人だ。」

「そ、そんな……」

絶望した表情で詩音が俯く。無理ないだろ？、好きな人がもう死んでいるのかもしないのだから。

「」の離見沢にあるのは祟りじやない。病氣だ。」

彼女は聞いていない。いや、聞ける状態にない。ならしてやれることは何か。

「悟史君が……悟史君が……！」

「……仇を取るつと思わぬいか？」

「はい……私は奴等を許さない……！協力させて下さー！」

「……いいだろ？。」

人材は揃つた。だがまだ分からぬ点はある。

北条悟史の生死、離見沢症候群と祟りの関係。動くしかない。園崎詩音を家に帰し、俺はある場所へ向かつた。

梨花視点

「気になつてたんだけど、何故天道なの？」

「どういふことですか？」

私は今一番疑問に思つてゐたことを口にした。何故天道なのか。
まああの洞察力や頭の良さなら大分有利になると思つが、あまり根拠がない。

そういうえば羽入は彼は世界を救つたと言つていた。
どうやつて？

「厳密に言つと、天道は自分の世界の歴史を塗り替えたのです。
……自分の命と引き換えに。」

「え？ 命と引き換え？ といふことは天道は……。

「はい、多分梨花が思つた通りなのです。」

彼は既に死んでいる。

私の考えはそこに行き着いた。

「お見せします。天道の全てを。」

羽入の言葉と同時に、私の視界は真っ白になつた。

第九章 カブト（後書き）

ついに物語も折り返し。

ご意見待つてまーす。

第十章 天道総司（前書き）

今回は天道の過去の話です。

映画見てない人はこれで流れをつかんでねー（ 、 、 ）

第十章 天道総司

只白いだけの視界が晴れていく。

これから見せられるのは何？羽入は天道の全てとか言つてたから…

…天道の過去？

徐々に覚醒してきた視界にまず飛び込んできたのは、廃墟となつたビル街だった。……なんだこれは、一体何が起こつたらこんなことになるんだ。

崩れたビルの数から推測するとここは都市部だらう。……天道がない。彼はどこだろう。

「助けて……助けて……！」

声が聞こえた。知らない少女の声。

見ると瓦礫の下敷きになつてている少年と少女がいる。少年は少女を助けようと必死に手を伸ばしている。

……だが、再び崩れた瓦礫によつて、手が届くことはなかつた。

羽入が脳内に語りかけてくる。あの少年こそが天道総司だと。

突然映像が飛ぶ。

今度は何もない荒野。砂漠と言つた方が正しいだろうか。

そこに複数の大人がいる。何やら言い争いをしている。

だが数分たつと空間を裂いて何かが飛来して、彼らの手にそれぞれ收まり

『変身！』

彼らは姿を変えた。

何だあれは？

（あれは、この世界にだけある、マスクドライダーシステムなのです。）

何なのよそれ。テレビじゃあるまいし、本当にそんなものが存在するのか。だが目の前で起こっている戦いを見ればわかる。全て本当。

……突然銃撃が止んだ。ライダーは皆ある一方を見ている。

あれは……天道！？

「お婆ちゃんが言っていた。俺は……天の道を往き、総てを向る男。天道…総司。」

天道が告げた瞬間、彼の基へ赤い何かが飛来した。

「変…身。」

天道も姿を変えた。何？彼もライダーなの？分からぬことだらけだ。地球があんな状態なのも、同じライダー同士戦っていることも。また映像が飛ぶ。ここは病院？青年が2人いる。片方は天道だ。もう1人はわからない。

話し声が聞こえる。

「ひよりは……どうすれば……。」

青年の声は今にも泣き出しそうだつた。

だが天道は立ち上がり彼を殴つた。そして胸ぐらを掴み

「そんなことで、ひよりを守れるのか！？」

初めて聞く天道の怒鳴り声。自分に向けられたものではないと分かつてはいるが、その迫力に圧倒された。

彼もまた悲しい過去を持つていた。だが私達のようにやり直しはない。

だから怒鳴ったのか。私は天道を舐めていたかもしない。多少洞察力や頭が良いだけの偉そうな奴、としか思つていなかつた。

場面がまた飛んだ。今度は何？この要塞みたいた場所で何が起こるの？

銀のライダーと黄色のライダーが戦い始めた。その間天道はタワーのようになつてゐる場所のすぐそばのパイプにバイクごと入つていつた。

場面が飛ぶ。ここは宇宙らしい。天道ともう一人が向かい合いながら変身した。戦いが始ました。

一進一退だつた。斬られたら斬り、また斬られて斬り返す。何回が同じことを繰り返した時、天道が銃弾を放つた。だが相手が交わし、銃弾は壁を破壊した。

2人は宇宙空間へ放り出された。だか彼等はクロックアップという装置を起動させまた戦い始めた。一体いつになつたらこの戦いは終わるのだろう。そう思い始めた矢先だつた。

宇宙ステーションから突然ビームのようなものが放たれた。そして宇宙空間の一部を裂き、そこから巨大な彗星が出てきた。青いライダーは安堵したようだ。だが、それも束の間だつた。

彗星の後ろから巨大な隕石が現れたのだ。

有無を言わさないかのように隕石は彗星を破壊し、その破壊のエネルギーの余波が宇宙ステーションの一部とさつきからずつと戦つていたライダー2人を吹き飛ばした。

天道は乗ってきたバイクを盾にすることで地球に降りることに成功した。

しかし銅のライダーは違った。大気圏の圧力に耐えきれず、地上に落下し爆死した。あまりに突然過ぎて状況が理解できない。今までに起こったことは私の持っていた常識を一気に覆した。本当に彼等は私達と同じ人間なの？ あまりにも非現実過ぎる。まるでテレビでも見てるようだった。言ってしまえば自分達だってありふれた日常とは言い切れないかもしれない。だがそれはまだ人間に出来る範囲には納まっていたと思う。彼等は違う。明らかに人間離れしている。思案に浸つていたい所だが、そうはいかないようだ。場所が変わった。どこかの病院だ。天道ともう1人の青年と、ベッドに力なく横たわる女性がいた。女性は何故か美しい花嫁姿だった。青年が女性の左手の薬指に指輪をはめた。彼は今にも泣き出しそうだ。天道も俯いている。

……何となくだが分かる。彼女は恐らく記憶で見た少女、ひよりなのだろう。もう彼女は長くないのか、自分の手足でさえ自分では満足に動かせないようだ。

……そして彼女は安らかな表情で目を閉じた。綺麗だった。天道は青年を残し黙つて出ていった。

壁にもたれかかっていた。辛いのだろう。苦しいのだろう。そして

「うわあああああああ！」

天道の叫び声が、虚しく病院内に響いた。

それからしばらくしたのち、彼等は病院から出ていった。歩く2人の前に立ちはだかる。大量の化け物。彼等は変身し、クロックアップで一瞬の内に化け物を蹴散らしていった。

どうやら彼等は半壊した宇宙ステーションを目指しているらしい。

宇宙ステーションから何かが発射された。恐らく隕石を破壊するための物。

天道達は間一髪でそのミサイルに乗り込んだ。だが息つく間もなく、天道達に巨漢の男が襲い掛かった。何とかしのぎ距離を空けると、彼はこういった。

「私のバラに彩りを加えましょつ。裏切り者の赤い血と、屈辱の涙を。」

その言葉が戦いの合図となつた。

「変身！」

「変身……！」

「変身……！」

次々に変身していく。天道が変身する赤いライダーと、青年が変身した青いライダー。

初めて見るのは巨漢の男が変身する金色のライダー。2対1だ。負けることはないだろう。

……だが、私の予想は大きく外れた。

H Y P E R C L O C K - U P

速い。あの金色のライダーは2人のライダーよりも更に早く動いた。一瞬の内に2人は宙を舞つた。その後も次々にダメージを負つていく。

「貴方の狙いは最初からこの”ハイパー・ゼクター”だったんですね。

今までしてきたことも、全ては私を誘きだす為に。」

金色のライダーが話す。天道はフラフラと立ち上がり、

「隕石は、眠れるワームを運ぶ振りか」... // サイルは、眠りを覚えます...王子様の、キスという訳だな...」

「その通り、もうじき圧倒的な数のワームが、地球を支配します。」

「... とこいとは、このミサイルで隕石を破壊するのは全くの嘘で、むしろ逆の効果をもたらすことになるのか。」

「お前は... それでいいのか... ? 地球を... ワームに支配されるんだぞ... ?」

「ワームであるうが人間であるうが関係ありません。」

この金色のライダー、人類が滅びてもいいというのか。もしかしたらこの男、鷹野達よりずつと恐ろしい考え方をしているかも知れない。

そういうしている内に、天道はまた弾き飛ばされた。

「バラの花言葉は愛。愛と共に散り給え。」

「ライダー... キック。」

金色のライダーが腰にあるハイパー・ゼクターの角を押した。エネルギーが溜まつていく。ライダー・キックを放とうとしている。だが天

道はダメージが大きく避ける力はないようだ。

このままでは天道が殺されてしまう。だが私には何もできない。どうすれば……！

「ウオオオオオオーー！」

だがライダー・キックが天道に当たることはなかつた。青のライダーが天道を庇うべく受け止めたからだ。

「今だーー！」

「つーー？」

天道は素早く脱出邸の扉を開け、金色のライダーからハイパーゼクターを奪い、ライダー・キックを当て脱出邸に押し込んだ。そして金色のライダーを宇宙空間に放り出した。青のライダーは倒れたまま動かなかつた。

变身が解けた彼は、

「お前の、声が…………ひょり…………。」

もはや虫の息だ。彼はもうすぐ死んでしまうのだろう。天道は彼を脱出ポッドに入れた。

脱出ポッドは地球に向かつて降下している。

だがそのポッドには金色のライダーが張りついていた。

「君だけは許さない。」

金色のライダーはポッドのガラスを破壊し、乗っていた彼の息の根を止めた。

H Y P E R C A S T O F F

C H A N G E H Y P E R B E E T L E

天道は金色のライダーから奪ったハイパー・ゼクターを作動させ、ハイパー・カブトへと強化変身した。しかしあう手遅れではないか。既に青年は死んでしまっている。一体天道に何が出来るというの？ 天道は宇宙空間に飛び出した。そして、

H Y P E R C L O C K - U P

天道がハイパー・ゼクターを作動させた。すると天道を除いた全てが巻き戻しのように逆戻りしていく。金色のライダーが青年を殺す直前今までいった所で、巻き戻しが止まった。
…………そうか、天道はこの力を使って歴史を塗り替えたのか。

「君だけは許さない。」

金色のライダーがまたガラスを割ろうとする。だがそれは天道によって防がれた。

「まさか、時間を戻したのか……？」

天道は金色のライダーを弾き飛ばし

M A X I M U M R I D E R P O W E R

「ハイパー：キック」

RIDER KICK

金色のライダーにハイパー・キックを当て、隕石に向かっていたミサイルもろとも消滅させた。そして天道は、隕石の方へ向かっていく。

「どこへ行く……？」

「俺は天の道を往き、妹を救う。」

「お婆ちゃんが言つていた。卓袱台をひっくり返していいのは、余程飯が不味かつた時だつてな。…………ちょっと7年前までひっくり返しに行つてくる。」

「さあ一緒にドライブだ。7年前のお仲間に会わせてやる。

ハイパークロックアップ

HYPERCLOCK-UP

時間がどんどん巻き戻つていく。この世界の地球はまるで全土が砂漠だったかのようだつたのに、徐々に青くなり、ついには私の知つてる地球そつくりになつた。

そしてワーム発生の原因となつてゐる隕石が地球に近づいてくる。そのすぐ前に天道はいた。

「受け取れ。俺からのプレゼントだ。」

天道は自分と一緒に時間逆行してきた隕石を押して、もとあつた隕石に突っ込んでいった。

ここは宇宙空間である。隕石と隕石がぶつかれば当然とてつもない衝撃波が走る。天道はその衝撃波に呑まれ、地球に落下していった。場所が変わり、また最初にみた廃墟に戻っていた。

「助けて…助けて…！」

少年が少女を助けようと手を伸ばす。これはいつか見た光景、また彼等は瓦礫に阻まれてしまうのか…？
だが違った。光と共にハイパー・カプトが降り立つ。ハイパー・カブト彼等を一瞥した後、天道の姿に戻り、自分のベルトを過去の自分に渡した。

「ひよりを頼むぞ。」

そして彼は消え去った。過去の天道はベルトを着けた後、自分にのしかかっていた瓦礫をどかし、しつかりとひよりの手を握った。

「大丈夫だ。俺がそばにいる。」

その言葉を聞いた瞬間、私の視界は真っ暗になつた。どうやらここまでらしい。

目を開けると羽入が目の前に立つていた。

「どうでしたか？」

「どうも何も、スケールがでかすぎよ。たった一人で地球を救うなんてすごすぎるわ。」

だがこれで分かった。彼の強さが。私達は本当に大きな味方を得たのだ。

「羽入、今回こそ勝つわよ。」

「勿論なのですよ！」

後は私達と天道の頑張り次第だ。平和な未来を掴み取る為に。

第十章 天道総司（後書き）

いやー今日は超頑張った(̄ ̄)

第十一章 今すべきこと

天道視点

昨日古手梨花から連絡が入った。俺の過去を観た、と……。正直そんなことはどうでもよかつた。問題なのはこれからどうしたらいいのかだ。

「恐らく園崎の力が必要になる。」

『そり……』

電話越しに伝える。園崎の力を借りないことに作戦が立てられない。ならまずは話をつけないとな。いくらなんでも園崎魅音や詩音の説得だけじゃ足りないだろう。

「明日、部活メンバー全員を連れて園崎家に説得をしよう。なるべく早く済ませてしまいたい。」

『簡単に応じてくれるかしらね。』

「そこはどうにかするしかないな。」

『どうにかって……。』

確かに一筋縄では行かないだろうな。園崎家は離見沢御三家の当主。それを説得するのは至難の技と言つてもいい。

「心配するな。俺もフォローする。だがあくまでもお前達の判断が鍵だということを忘れるな。」

『分かつたわ。』

ひとまず電話を終了させる。俺はもう一仕事しなければならないな。

「あの、私に何か御用があるんですか?」

「ここは園崎詩音が働いている飲食店『エンジェルモード』。そう、俺が用があるのは園崎詩音だ。」

「ああ、お前について来てほしい場所がある。」

恐らくこれからすることは園崎詩音にとって、とても重要なことだ。俺の勘が正しければ、あそこに行けば謎が解ける筈だ。

「それで、この用件は何でしょうか。」

俺が園崎詩音を連れてきた場所、それは入江診療所だ。詩音には一通り話が済むまでなにも言つなとは言つたが、まあ出来ないだろつな……。

「单刀直入に聞くが、お前、北条悟史について何か知つていいか?」

「い、いえ、私は特に……。」

嘘だな、あからさまに目が泳いでいる。やはり間違いないな。北条悟史の行方を入江は知っている。

「…………俺は、本当の事を聞きたい。お前がどんな気持ちで、北条悟史を匿っているのかは知らんが、悟史に対する想いが一番強いのは園崎詩音だ。…………応えてやれ。」

「…………分かりました。ですが彼は今難見沢症候群の末期状態です。治療室には入らないことを条件とします。」

「わかった。」

「監督…………悟史君は無事なんですか？」

「ええ、命に別状はありません。ただ…………」

「ただ?」

「彼は末期状態なので、目につく人間全てを恐怖の対象として認識してしまいます。」

「そんな…………。」

「大丈夫です。彼は私が必ず治してみせます。」

治療室に着いた。あれが北条悟史か……。暴れ出さないように手足を拘束しているようだな。近くにあるぬいぐるみは一体誰の物なんだ?

「悟史君……」

悟史か……今は眠っているようだが起きれば暴走か。ここにあまり長居はできないな。これは早く帰った方がいいだろう。

「私、絶対貴方を助けるからね……！」

「…………詩音、行くぞ。」

「…………はい。悟史君、待つててねー！」

入江と別れ帰路につく。……はで、いつまでたっても詩音が離れないのだが、もしかして……?

「お前……ひょっとしてこのマンションに住んでるのか?」

「はい……あれ?先生もなんですか?」

こんな奇遇もあるのだな。まさか住まいが一緒だとは。よし、事の

ついでだ。今日は俺が腕を振るつてやる。

「え？ 天道さん料理出来るんですか？」

「当然だ。」

キッチンに移動し食材の確認をする。……今日は麻婆豆腐にしよう。一人で食べる分には多いかもしけんが一人なら特に問題ないだらう。

早速作るうとした瞬間、玄関が開き誰か入ってきた。

「おや詩音さん、その方は誰です？」

外見こそスーツにサングラスを掛けた一般人のよう見えなくもないかもしれないが、体つきが良い。あれは相当出来る人間だらう。

「葛西、」こちらは天道総司さん。お姉の学校の先生よ。」

「そうこうじだ。お前は詩音とはじついう関係だ？」

「ある種のお守りのよつな者です。」

「やうか、ならお前も飯を食つていけ。」

「お言葉に甘えさせていただきます。」

あいつも加わってくれればかなりの戦力が期待出来そうだ。まあ今は飯だ。腹が減つてはなんとやら、だしな。

「お、おこしー……。」

「ふむ……確かにこれはおこしい。随分とお上手ですね。」

葛西と詩音から驚いた表情で言った。当然だ。俺は天の道を往くる男だからな。そんじよそちらの奴とは比にはならん。腹(は)しゃれも済んだところで、本題に入るとするか。

「明日俺は古手梨花達を連れて、園崎家に行こうと思つ。」

「それは……何の目的で?」

葛西の目付きが鋭くなつた。下手を踏めばこいつは俺を殺しにかかりてくるだらう。

「俺達は今園崎家の力が必要だ。あまつ悠長なことは書つてられない状況でな。」

「まさか、詩音さんも巻き込むつもりでしようつか?」

「……そのつもりだ。」

「貴様……。」

…………大した主人愛とやらだ。中々骨が折れそうな人間だな。だが

引き下がれる筈がない。」には押し通すか……。

「葛西……よく聞いて。これはね、雛見沢の未来がかかってるの。今放つておいたら危険なのは私だけじゃない。雛見沢全ての人達犠牲になりかねないの。だからお願い、貴方も力を貸して。」

「これは驚いた。まさか詩音がここまで言えるとは。……見直したぞ、園崎詩音。」

「……分かりました。どうやら嘘ではないようですね。」

「それで、いつ行くんですか？」
「明日だ。覚悟を決めとけよ。」

「わかつてますよ。あの鬼ババですもんね」

「それで、私等に協力して欲しいってのかい？」

「はい、俺達はとても大きな敵と戦わなきゃならないんです。その為には、俺達だけじゃ駄目なんです。どうか園崎の力を貸して下さい!お願いします!」

園崎茜、園崎お馴に對し前原圭一が頭を下げる。それに續いて他の皆も同じように頭を下げる。

「ふん、なんでガキ共の喧嘩なんぞに首突つ込まにゃならのかい。警察とは和解した、それでアタシらは満足なんだけどねえ。」

「わしらがおどれらに力貸して、一体何になるつて言つんだい。ちいとばかし調子に乗りすぎなんじゃねえだろつな。」

2人からの返答は良くなかった。むしろ次下手を踏んでしまえば、すぐに追い出せんばかりの勢いだった。

「帰んな。これ以上ゴタゴタ言つたらあたしらだつて黙つちゃいなによ。」

「つ……。」

園崎茜の威圧感に圧倒される。だがそれで引き下がれる訳でもない。圭一は自分の脳内をフル回転させ、なんとか言葉を紡ぐつと試みた。

「や、それでも俺達は本当に」

「いい加減にせんね！多少の無礼には目を瞑つたーからあと出でいきなー！」

「う……！」

今度こそ圭一は言葉を失った。これ以上刺激してはいけないと、仲

間達が目線で語り掛ける。……只一人を除いて。

「いい加減にするのは貴様等の方だ。」

「な……！」

「先生……！」

「そうかい、お前が天道か……。」

「……この村は、一人が何かされたら一致団結して立ち向かうんじやなかつたのか？」

「……。」

「それに、何故前原が引き下がらなかつたか分かるか？」

「……何だい。」

「お前達の機嫌に構つてゐる程の余裕はないといづれどだ。」

梨花視点

天道にどんな考えがあるのか分からぬけど、あの二人を挑発でもしているような口調だ。マズい、どんどん怒らせてしまつてゐる。

「！」あんじようすつたらん……一生きて帰るとと思つとんのかい！？」「！？」

「はあ… もうひとつと分かりやすく喋れ。」

「天道！お嬢！止めて！！」

お麵が布団の中に隠してあつた刀を取り出し天道に斬りかかつた。対する天道は一步も動かない。

刀が天道に届こうとした瞬間、部屋の障子を突き破ってガブトセクターが現れ、刀を弾いた。

「天道！？何する気！？」

まさか変身しようとしているの？あり得ない、こんなところで変身したら、何も知らない連中は大パニックになる。それに知っているのは私と羽入だけだ。

「……全員に今の状況を知つてもうつだけだ。この場に招かれざる客がいるということをな。」

「客」？

「お前と羽入以外にこのカブトゼクターの出現に動搖しなかつた者が1人いる。」

天道は園崎お駒達の周りの極道1人に指をさし、こう言った。

「お前はワームだ。」

「ちい！」

その男は緑色の異形の怪物、ワームに姿を変えた。ワームは天道に飛び掛かり、その右手を振るった。その右手は天道を捉えることはなく、宙を空振りしただけだった。

ワームの背後に回った天道は、素早くワームに蹴りを入れ、園崎家の庭に弾き出した。

「やはり俺を暗殺しにきたか……だが貴様では一万年早い変身。」

H E N S H I N

天道は仮面ライダーカブト・マスクドフォームに姿を変えた。

「貴様は俺達の計画にとつて非常に邪魔な存在だ。消えてもいい!..！」

「…………やはり、ワームが絡んでいるか……。だが、貴様等を許す訳にはいかん。」

ワームはカブトを爪で引き裂こうと腕を振り上げカブトに襲い掛けた。カブトはそれを軽くかわし、逆に拳を叩き込んだ。

戦いは、カブトが優勢に進めていた。だが、ワームに異変が起つた。緑色の体が膨れ上がり、中から別の個体が現れた。

ワームが脱皮して成虫になつたのだ。

さなぎ体からアラクネアワームに進化したワームは、クロックアップ能力を使いカブトに攻撃を仕掛けた。

「ぐ……！」

速さに着いていけず、カブトは四方八方から連続攻撃を受け、地面に伏した。

だが、すぐに立ち上がると、ゼクター・ホーンを起こした。
「キャストオフ。」

CAST OFF

CHANGE BEETLE

マスクドフォームのボディが飛散し、ライダーフォームになった。

「クロツクアップ。」

そして、腰部分にある、クロツクアップ機能を使い、カブトも超高速の世界に入った。

カブトはクナイガンでワームを斬り刻んで行く。
ワームは対抗すべく、口から蜘蛛の糸を吐き出した。だが、カブトは全てを避けた。

不意にカブトはワームに背を向けた。
ワームは絶好のチャンスと思い、カブトに向かつて走つて行つた。
カブトはベルトのボタンを順に押していく。

ONE・TWO・THREE

「ライダー…キック…！」

RIDER KICK

「ハアッ！！」

近づいたワームの攻撃がカブトの間近まで迫った瞬間、カブトはライダーキックを放った。

「ぐあ…………！」

ワームは地面に倒れた、恐るべくはもう立ち上がりがないだろ？

「これが…………カブトの力か……………！」

「そうこうい」とだ。

「ふん…………いい氣になつていろ、我々は既に動き出していく。」

「…………何匹来ようとも、ワームは必ず倒す。」

「せいいぜこまざわこじいわ…………ぐあああああ…………！」

その瞬間、ワームは爆発した。

天道は、ワームがいた場所をずっと見つめていた。

第十一章 今すぐ! (後書き)

スーパーヒーロータイム（本編とは関係ありません。）

『変身!』

CHANGE STAGBEEFLE

天道「こいつは加賀美新、仮面ライダー ガタックの資格者だ。」

圭一「へえ、天道先生以外にもライダーがいるのかあ。」

天道「馬鹿で不器用だが、奴は前向きで一生懸命な人間だった。」

圭一「それじゃ、俺とかなり似てますね」ニヤニヤ

天道「そうだな、馬鹿という点では認めてやろう。」

圭一「な……!？」

天道「ひぐらしのなく頃に(天の道編) 次回も見てくれよな。」

圭一「か、勝手に終わらすなあああああああーー!」

第十一章 作戦

ワームを倒し、カブトから天道の姿に戻つた彼は、まだ啞然としている圭一達の基へ戻つて来た。

沈黙を破つて何とか口を開いた園崎茜は、天道に問いかける。

「あんた……何者なんだい？」

天道は太陽を指差しながら答えた。

「俺は天の道を往き、総てを司る男。天道…総司。」

質問者である園崎茜は「答えになつてないじゃないか。」と言ったそうにしている。

まあ確かに皆が聞きたいのはそんなことじやないだろ？。

「天道、私達は……」

「これが何か知りたいんだろ？」

天道はカブトゼクターを手のひらに乗せて言った。皆が頷く、天道はカブトゼクターを手から放した。

「簡単な話だ。俺は選ばれし者だからだ。」

偉そうに言つてるけど、私には分かる。天道が今の力を手に入れるまでの過程、彼の苦労も。天道の過去から通じて私は知つた。結局天道も私達と変わらないんだって。

「奴等の動きが分からん以上、ワームのことも視野に入れなければならない。そこでもう一度聞く、園崎お軀、お前はこれを見てもまだ自分は高みの見物を決め込むつもりか？」

「……好きにせい。」

よかつた……！やつと園崎お軀を説得できた。これで話が上手く進みそうだ。後はカブトの事を皆に説明して、何とか納得してもらおう。

天道視点

……少々面倒なことになつたな。ワームのことはたつた今全員が知つた。問題は奴等のことを配慮した上で行動しなければならない。対処できるのは俺だけ。 策を変える必要がありそうだ。

「……前原。」

「ん? 何すか?」

「俺はワームに集中したい。だから計画から俺を外して欲しい。」

「え? あ、そうか、あれに俺達は適わないしなあ。」

「待てよ、俺がいない所に擬態したワームがこの面子の中に紛れ込んだとしたら……。」

「……色々面倒な事態になつたな。」

「……よし、いうなれば仕方ない。事情を伝えてしまおつ。」

「皆、話がある。」

少しばかり声を張り、呼び掛けた。園崎の人間達全員集め、語り掛ける。

「俺はワームの相手に専念したい。だから鷹野達の相手はお前達に任せたい、だが相手は戦闘のプロだ。正面から戦えば勝ち田は薄い。やれるな?」

場を静寂と重苦しい雰囲気に支配される。無理もない、ここのはずは俺の力にかなり頼っているからな。

だがそれでは駄目だ。奴等は奴等自身で動く必要がある。俺はオマケに過ぎないし、ワームを相手にしながら前原達の援護をするのは無理がある。

「そうだな、天道先生にばかり頼つてもいられねえ。俺達は俺達の力で未来を掴むんだ！」

前原圭一のリーダーシップのお陰で、士気はかなり上がつていた。だが、その会合を盗み聞きしていた者がいた。その影は素早く園崎本家から離れ、およそ人間とは思えないスピードでどこかに向かつっていた。

？？

「報告します、古手梨花達は、我々の存在に気付き、作戦を練つている模様。」

「了解、再度潜入り、情報収集を続行しろ。」

「了解。」

2つの影の内、1つがまだどこかへ去つていった。
残された影のもとへ、誰かが近付いてきた。

「首尾はどう?」

「恐ろしいくらいに良好ですよ、鷹野さんよ。」

2つの影 、鷹野三四と小此木は成果を語り合っていた。本来2人は圭一達の作戦会議がどのように行なわれているかなど知る由もなかつた。だが鷹野が天道に対し、警戒するよう心掛けた次の日だった。謎の一団が鷹野達の計画に協力したいと持ちかけてきたのだ。

彼らの狙いは天道総司だと、鷹野は当初断るつもりでいたがある時を境に考えを変えた。

彼らの能力を見たからだ。……そう、謎の一団とはワームだった。ワームの擬態能力を見た鷹野はとても驚愕した。だが同時に鷹野は心の中で歓喜した。

彼らの力があれば天道総司など簡単に始末出来ると思った。だが現実はそう甘くはなかつた。

天道はワームに対する力を持つていた。それはカブトだ。あんなものいくら自分達の部下をぶつけても勝てないと直感した。加えて天道自身かなりの実力を持っていた。

ワームをいとも簡単に倒してしまったことと、洞察力の良さは侮れない。

ワーム達が提示してきた策は得策ではなかつた。あまり頭は良くない連中のようだ。

だが効率よく使えばとてもいい働きをする、そう思った彼女はまず園崎家のうちの1人に擬態させた。

そして会議を知り、念のためもう一体擬態させて送り込んだ。

こちらのワームには天道にはわかるくらいに不審に動きをするように命じた。

案の定天道は気付き、すぐに倒した。だがそれが隠れ蓑となり、あらかじめ潜入していた方はバレずに今に至る。

「よく働いてくれるわあ。これならあの鬱陶しい男に一泡吹かせられるわね。」

「あらゆる人間には適材適所つてもんがありますからねえ。奴等は表立つて行動するより、こそそそ裏で暗躍した方が助かりますな。」

2人は確信していた。こんどこそ天道を出し抜けたと。後は人海戦で仕掛ければ天道一人くらいなら何とかなるだろう。あくまでも自分達の目的は古出梨花の抹殺だ。あの古出梨花が既に死亡しているなんて情報は只の時間稼ぎなんだろう。何せ敵を欺くことに関して奴等がこちらを上回ることは絶対にできないのだから。

第十一章 作戦（後書き）

「スーパーヒーロータイム」

『風間流、メイクアップ』

レナ「はう～、あのメイクすこい上手だよお、いいなあ。」

詩音「やっぱりお化粧もこの女の嗜みの一つですよね。」

魅音「うーん……あたしゃイマイチつてとこかなあ。」

詩音「またまたお姉つたら、そんなどと前原さんは振り向いてくれないわよ？」

魅音「な、ななな何言つてんの！？そ、そんなんじやないもん！」

鷹野「あらあ、初々しいわねえ。」

魅音「つて何であんだがいんの！？」

鷹野「いいじゃない、私だつて化粧には氣をつけてるんだから。」

天道「……ふむ、お前達の姿なら化粧などせんでもいいだろ。お婆ちゃんが言つていた。本当の綺麗なのは、作り上げられた顔ではなく、純粹な笑顔だつてな。」

女性陣「／＼／＼／＼／＼」

圭一（何でだ！？何で先生は真顔であるなことが言える！？）

富竹（鷹野さん……）

梨花「次回も見て下さいなのです。こぼーー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9963p/>

ひぐらしのなく頃に～天の道編～

2011年7月23日07時48分発行